2220　離島覚書（鹿児島県平島）

令和４年 10 月 19 日

平島荷役組合

口之島を５時 10 分に出発したフェリー「としま２」は、中之島、諏訪之瀬島を経て、８時 45 分に平島（たいらじま）の南之浜港に着いた。私を含めて５人が下船した。２人は気象庁の職員、もう２人は浄化槽の水質検査員であった。平島には東海岸にもう一つの港、東之浜港があるが、主に南之浜港が使われている。

宿泊する民宿たいら荘のご主人が迎えに来ていたが、フェリーの荷役作業が終わるまで 10 分ほど待たされた。平島では 65 歳未満の男子全員が荷役作業に従事することが義務付けられていて、12 人ほどがせわしく働いていた。係留用ロープの着脱、コンテナを積み下ろし作業、荷物の配分など、それぞれ役割が決まっているようだ。

平島では荷役組合がフェリーを運航する十島村役場から荷役作業を受託しており、年間 600 万円ほどの収入になる。しかしこの受託収入は個人の収入にはならず８割ほどは自治会の資金になるらしい。つまり組合員はボランティアで働いていることになる。上り便と下り便がそれぞれ週２便あるので、週４回は拘束される。

口之島ではこのような仕組みはなく、個人が役場と雇用関係にあるので、荷役作業に従事した場合は日当が入る。雇用機会の少ない島では貴重な収入源になるから機会均等の観点から順番制になっている。このように島によって荷役の仕組みが異なるのは興味深い。

平島は面積 2.08 ㎞^{2}、周囲 7.23 ㎞で、十島村の有人７島の中では小宝島に次いで小さい。平島とは名ばかりで、平らな土地は一つもない。急峻な地形で、全島がリュウキュウチクと一部ビロウの木で覆われている。平島の集落は港から急な坂を登った中腹に形成され、１島１集落である。

役場の出張所によると、島の世帯数は 40 戸、人口は 76 人とのことであった。このうちＩ

ターン者が７戸、後述するように小中学校の教職員が９戸、地域おこし協力隊が３戸なので、島の出身でない世帯は 19 戸であり、全体の約半分を占めている。島の主な産業は畜産業（黒牛の繁殖）と漁業である。

荷役作業に従事する組合員（左）、南之浜港（手前が漁船の船溜まり）（右）

民宿たいら荘

荷役作業を終了後、民宿たいら荘の用沢満男さんの軽自動車に乗り、コミュニティセンター近くにある宿に着いた。平島にはたいら荘の他に平和荘、大峯荘、海の宿しらさかの３つの宿泊施設がある。島には飲食店がないので、各民宿とも１泊３食付きである。

用沢さんは村会議員を 20 年以上務めたベテランで、現在は民宿と漁業、遊漁案内業を営んでいる。議員を長くやっていた関係から顔が広く、（公社）日本離島センターの人々や稲垣尚友さん（臥蛇島（がじゃじま）が無人島になった後、平島に住み、現在は千葉県鴨川市で竹細工職人をしている民俗学研究家）、島の紀行作家である斎藤潤さんなどとも懇意にしているようだ。

民宿の顧客は遊漁客が多く、建物の廊下の壁や天井には魚拓や写真が所狭しと貼られている。魚拓はカッポレ、イソマグロ、バショウカジキ、カンパチ、アラなどの大物がずらりと並ぶ。

用沢さんの漁船は秀海丸といい、３トンほどだ。深場の釣りとトローリングを専門としている。トローリングはジグよりも活ムロアジの方の「食い」がいいそうで、もっぱらムロアジを餌にしている。

これから昨日釣った魚を鹿児島に出荷する準備をするというので、ついて行った。港から坂を登った中腹に小さなプレート式製氷施設がある。すでに発泡スチロールの箱にホタ（アオダイ）とクロマツが収納されていた。この上に増氷を施して蓋をし、港に置かれた冷蔵庫コンテナに放り込んだ。この魚は翌日のフェリーに積み込まれて鹿児島港まで送られ、明後日のセリにかけられるそうだ。

鹿児島市地方卸売市場には、鹿児島県漁連と九州中央魚市㈱の２社の卸売会社があり、用沢さんはもっぱら魚市の方へ出荷している。というのも県漁連は出荷に用いた魚箱が使い捨てになって戻って来ないためだという。

漁獲した魚は、このように鹿児島市内に出荷するケースと、人口が少ないものの一定量の島内消費があることから島内販売、それから後述する水産加工場で冷凍加工をしているのでその原料として供給、の３つのルートで流通している。

民宿たいら荘（左）、魚を出荷する冷蔵コンテナ（右）

東之浜港

再び用沢さんの軽自動車で民宿に戻り、すぐに歩いて東之浜に向かう。

民宿から坂を下ると、水産加工場と山海留学生の「平島寮」があり、ここを左折するとすぐにヘリポートがあった。

その反対側にアメダスの気象観測所があり、フェリーで一緒だった２人の気象台職員が機器の点検と交換作業を行っていた。平島のアメダスは降水量のみ測定しているとのことで、風向風速計は置かれていない。降水量の測定は小さな盃のようなものに水がいっぱいになると「ししおどし」のようにカウントされ、その回数に盃の容積を掛け算することによって降水量を求める仕組みで、こうしてカウントした数値をリアルタイムで送信している。

この少し先に「海の宿しらさか」がある。この民宿の経営者は鹿児島大学水産学部を卒業した 30 歳になる方で、令和３年にオープンしたばかりの新しい宿だ。ご主人は宿泊客への食材を確保するために漁業も兼業している。なお民宿を始めるにあたり、口之島の「民宿なかむら」（３泊した宿）から指南を受けたようで、しかも民宿の設計者も同じ人であることから外見はそっくりであった。

「しらさか」の先が大浦展望台と東之浜に行く道の分岐になり、ここから村道東海岸線になる。そのまま進むと南之浜が眺望できる場所にでた。遥か眼下に南之浜港の船着場が見える。下までヘアピンカーブが続き、標高差は 100m以上あるだろう。その先に悪石島が横たわっていた。

やがて東側に向きを変えると、御岳（おたけ）が噴煙を上げる諏訪之瀬島が現れた。このカーブを過ぎると無人の牛舎があり、親牛４頭が飼われていた。付近には作業場や牛糞の堆肥置き場もある。この一帯の斜面は放牧場になっていて、周囲に有刺鉄線が張られている。放牧場といっても餌はリュウキュウチクであり、トカラ列島の他の放牧場とも共通する。

やがて下り坂になったが、猛烈な北風が正面から吹き込んできて歩くのが大変だ。南海岸と打って変わって沖には白波が立つ。眼下に東之浜港と東之浜海岸が見えてきた。

東之浜港は突堤が一文字の伸びただけの簡素な港だ。よほど南側の海象条件が悪い時だけに使われているのだろう。海岸は手前が石浜、その先（北側）が白い砂浜に変わる。

陸側にはコンクリートの工場があり、使用する砂が山積みになっている。原材料は東之浜に陸揚げされているようだ。ちなみに南之浜港の脇にもコンクリート工場があり、島には２

つの業者がいるらしい。

背後の山は一面リュウキュウチクで覆われているが、この一角だけはビロウの木が群生しているのが目立つ。海岸まで降りると、帰りの登りが大変なことから途中で引き返した。

アメダスの点検をする気象台の職員（左）、東之浜港と東之浜海岸（右）

大浦展望台と畜産農家

「海の宿しらさか」の手前まで戻り、ここから村道大浦展望台線を展望台へと向かう。道路標識には展望台まで 0.9 ㎞と書いてあった。東之浜港に向かう道と平行に 20～30mほど高い位置につくられた道路である。相変わらず北風が強く、風を正面から受けて難儀する箇所もあったが、約 20 分で展望台に着いた。

展望台の標高は 131mで、この場所は「しま山 100 選」に選ばれている。木製の展望デッキが整備され、階段のほかにスロープも用意されているから車椅子でここまでくることも可能である。

平島は口之島から宝島に至るトカラ列島のほぼ中間に位置する。また口之島、中之島、諏訪之瀬島、悪石島がほぼ一直線上に並ぶのに対して、平島と無人島の臥蛇島は西側に大きくずれているので、平島の大浦展望台からはトカラ列島の全島を見ることができる。恐らく全島を見ることができるのはこの展望台だけだろう。トカラ列島の北にある屋久島と口永良部島も天気のよい日には見ることができるそうだが、あいにくこの日は快晴であったものの、霞がかかり、この両島と小宝島、宝島は見ることができなかった。

展望台の背後は広場になっており、トイレも整備されてキャンプもできる。展望台に登るスロープの脇に太くて長い南洋木材のような丸太が置かれていたが何だろう。この位置に流木があることも考えにくく、謎の材木だ。

展望台からの道を戻ると、右手に牛舎があり、先方にトカラヤギを認めた。その先に人影を見つけたので、牛舎の方に歩いて行くと女性が牛に草を与えていた。牛舎には親牛３頭と子牛４頭がいた。18 日に子牛２頭をセリに出したばかりだという。

この牛は、弟の日高久志さん（村会議員）と従兄妹の牛のようで、２人とも島を離れているため、留守の間の餌やりを頼まれていたのだという。牛舎の牛は１日たりとも餌を欠かせないのでこうした応援部隊がいないことには牛は飼えない。

彼女は 37 年ぶりに夫とともにUターンし、島では見守り支援、郵便局勤務、山海留学の平島寮の寮監などをし、現在は学校給食の補助員の仕事をしている。車の中にネコがいたが、

自宅では 30 匹ものネコを飼っているという。避妊手術をしているのでこれ以上は増えないといっていたが、いわゆる「ネコ屋敷」のオーナーである。

餌は集落周辺のかつて田んぼだった場所の草を仮払い機で刈って運んできた。彼女によると、平島の畜産農家は発電所勤務と議員（彼女の弟）の兼業を合わせて７戸である。弟は親牛を 15 頭飼養している。また、人工授精士の資格ももっているそうだ。共有の放牧場は島内に５ヶ所あり、親牛が放牧されている。しかし急峻な崖が多く、放牧中に死ぬケースもあるらしい。

2020 年時点の平島の畜産農家数は８戸、雌牛（親牛）の飼養頭数は 44 頭、子牛の出荷頭数は 23 頭であった。７島の中では子牛の出荷頭数は小宝島と並んで少ない。なおＵターン等の新規就農者は村の繁殖雌牛預託事業に基づき、90 万円が導入後５年間貸与される。

大浦展望台とキャンプ場（左）、牛舎（右）

アスファルトルーフィングの集落

昼すぎに民宿に戻り、天麩羅うどんの昼食を食べる。味付けはなかなかのもので、具が多くて美味しい。用沢さんは一人暮らしだが、料理の腕前はたいしたものだ。ご飯もついてきたが多すぎるので断った。食後に、岐阜県の知人から柿が送られてきたといってデザートとして出してくれた。一休みしてから集落を巡ることにする。

たいら荘のすぐ右手がコミュニティセンターで、この中に役場の平島出張所とあかひげ温泉が併設されている。職員が１名配置されていて、Ｉターン者のようだ。温泉は火木土曜日の限定営業のため、この日は残念ながら休みだった。13 時すぎに出張所に顔を出し、翌日のフェリーの切符を購入、島の様子を少し聞く。島に関する資料はないか問い合わせると、平成 25 年に発刊された原隆利氏の写真集「海と焼酎」を見せてくれた。

コミセン内には 1961（昭和 36）年当時の平島の概要と書かれた紙が貼ってあった。これによると、当時の人口は 180 人、世帯数は 36 戸で、児童数 34 人、生徒数 14 人、先生５人とある。先生を除くと 31 戸という勘定だ。島の農家数は 29 戸であったから、島のほぼ全戸が農業を営んでいたことになる。米、小麦、甘藷をつくり、牛 62 頭、豚 25 頭、鶏 166 羽が飼われていた。そして漁船数は 10 隻でこのうち９隻が無動力船であった。平島はまさに自給自足の生活をしていたのだった。

コミセンの対面には新しい村営住宅が３棟建っていた。２軒長屋なので６戸分だが、現在の入居者は２戸だけだそうだ。その隣に九州電力のディーゼル発電所がある。

コミセン前の緩やかな坂を登ると住宅が立ち並ぶ。この一帯が昔からの集落である。

平島には例によって平家伝説もあるが、史実が明白になるのは、1609（慶長 14）年に島津氏の琉球出兵の水先案内をした日高喜右衛門盛勝の代からといわれている。平島は後述するように水田に恵まれており、集落の前と背後に水田があった。また焼畑による粟栽培や漁業も盛んで、昭和 30 年代までは各家の釜小屋で鰹節を製造していた。藩政時代の年貢は鰹節 1,730 本、煎 18 斤、真綿 135 匁、かまど税（１戸当たりの税）銀１匁、その他であったというから、鰹節は島の産品として重要な存在だったのである。これを年１回年貢船で積んで鹿児島に上り、帰りに素麺、衣類、日用品などを買ってきたといわれている。

集落の中には廃屋が目立つ。そして実際に人が住む家の屋根は諏訪之瀬島や口之島で観られたと同じアスファルトルーフィングの屋根が多い。本来は瓦やカラーベスト、トタンなどの下地として張るものだが、これがむき出しになり、その上にコールタールが塗られている。口之島の場合は屋根が黒色だと熱を吸収して部屋が暑くなるため、白いペンキがその上に塗られている家がほとんどだったが、平島の場合は諏訪之瀬島と同様、黒のままである。

集落内には白と黒の斑が特徴のトカラヤギが飼われている家が数軒あった。民宿の用沢さんによると、島の行事の時に天然のヤギを捕まえてヤギ汁を食べるのが習わしだったが、獲りすぎてしまい、今では魚汁にかわっているという。

集落内のところどころに自給用の畑がある。畑の脇にはバナナが植えられており、ちょうど房をつけ、収穫まじかなものも見られた。またドラゴンフルーツやパッションフルーツなどの畑も見られる。

アスファルトルーフィングの家（左）、飼われているトカラヤギ（右）

寺と墓

集落の中心から西の方角へ坂を下っていくと、村立平島へき地診療所があった。ただし若い看護師が 1 人常駐しているだけだ。

その対面に平島（島立）神社が置かれている。赤く塗られた鳥居の先に簡素な建物がある。ガイド板によると、この神社には島内にあった島立様、御岳様、御祖廟様などの島の神様が合祀されているそうだ。以前は自然石を一間四方に積んで島立様の墓として拝まれていたという。また、この場所は「トンチ」と呼ばれ、代々の郡司が居住した場所で、島の政治の中心であった。。

神社の前の道をまっすぐに進むと、やがて竹藪になり、海に下ることはできない。しかし、

かつてはこの急坂の下に前之浜という船着場があった。もちろん当時は船が接岸できるわけではなく、沖に停まっている船との間を艀で往復した場所だ。南之浜港が整備される以前の 1970 年代までは、もっぱらこの前之浜が島の玄関口だったのである。

民宿の用沢さんによると、前之浜の艀から荷を揚げる仕事は島の青年団の仕事だったという。ところが島の事情がわからない学校の先生は大きな箪笥をもってくるため、これを担いで急坂を登るのは大変な苦労だったそうだ。

行き止まりから引き返し、神社の手前の道を左折すると、牛舎でお会いした女性の家があった。ネコを 30 匹ほど飼っているといっていたが、家の玄関付近にはネコが群がっており、まさにネコ屋敷である。

民宿大峯荘の下に、寺と呼ばれる場所がある。島では寺は墓地を意味し、本土のような寺院があるわけではない。道路を挟んで両側に墓石が建っていた。一様に北西方向を向いている。墓石に書かれている氏姓は、日高５、用沢２、別府、倶、中島、池畑が各１、改葬済みの墓は４基であった。平島では日高と用沢が圧倒的に多い。墓石は全部で 11 基なので、島の昔からの世帯は墓を残している 11 戸前後なのかもしれない。江戸時代は年貢を納めた帰りの船で山川港に寄って墓石を購入したそうだが、墓石は新しいものが多かったので今は山川のものではないかもしれない。

島立（平島）神社の鳥居と社殿（左）、寺と呼ばれる墓地（右）

平島小中学校

集落の最も高いところに村立平島小中学校が置かれている。学校の入口で未就学と思われる子供を連れた親か先生（？）に偶然会った。未就学児童数を尋ねると４人とのこと。学校の奥に「たいらっ園」と呼ばれている「子育て支援施設」（法的に認可を受けていないので保育園とは呼ばない）があった。

小中学校の校舎の上部壁面には学校の教育方針と思われる「健康、自主、明朗、根性」の標語が書かれていた。掲示板には平成４年度の職員と児童生徒が顔写真入りで紹介されている。

これによると、児童・生徒数は、小学生３人（小１、小３、小５が各１人ずつ。このうち小１と小３は先生の子息）、中学生は７人（中１：２人、中２：４人、中３：１人）、合計 10 人である。一方、教職員は、校長、教頭の管理職が２人、小１担当と、小３と小５の複式担当、中１担当、中２，３の複式担当、中学校の副担当、養護、ＡＬＴの教諭、合わせて９人

である。なおＡＬＴはジョナサン・カルキリというイギリス人で、２か月前に赴任したとのこと。彼には郵便局で会ったが、片言の日本語だった。また、この他に給食の調理担当１名、補助３名が働いている。補助のうちの１名は牛舎でお会いした日高美佐子さんだ。

十島村では島の活力を少しでも維持しようと各島の小中学校と同様、島外から「山海留学生」を受け入れている。その実情を聞くべく、職員室に顔を出した。ちょうど中学生の７人は３年に１回の修学旅行中で不在、先生の一部も同行しているため、職員室は閑散としていた。若い女性の養護教諭が対応してくれ、すぐに校長室に案内された。

校長先生は島に赴任して３年目とのこと。コロナとともにやってきたという。どういう動機で島を巡っているかを聞かれ、簡単に経緯を答えた。校長先生は教員住宅に住み、昼食は子どもたちと同じ給食を食べ、朝晩は自炊しているとのことだった。

山海留学生は６人で、出身地は東京都、神奈川県（相模原市）、愛知県、宮崎県から各１人、鹿児島県内が２人という内訳で、集落下の「平島寮」で生活を共にしている。全校生 10 人のうち、先生の子息が２人、山海留学生は６人なので、島に元から住んでいる児童生徒は２人ということになる。

校舎の背後には崖が迫り、校庭らしきものはない。校長先生に聞くと、裏側に「健康広場」と呼ばれる広いグランドがあるので、ここを利用しているとのことだった。

村立平島小中学校の校舎

村道運動公園線

学校を後にしてから、かつて田や畑があった山裾の道を反時計回りで一周することにした。この道は村道運動公園線と呼ばれている。小中学校の裏に出ると、かなり広いグラウンドがあった。「健康広場」と呼ばれ、運動会や行事の時に使われるのだろう。また、上述したように学校には校庭がないので、体育などの授業ではもっぱらこの広場が校庭代わりに使われている。

グラウンドドには１周 100mほどのトラックも設けられている。島では唯一の平らな土地になるが、農地の少ない平島ではグラウンドとして使う余裕はなかったと思われるので、おそらく以前は田んぼだったに違いない。

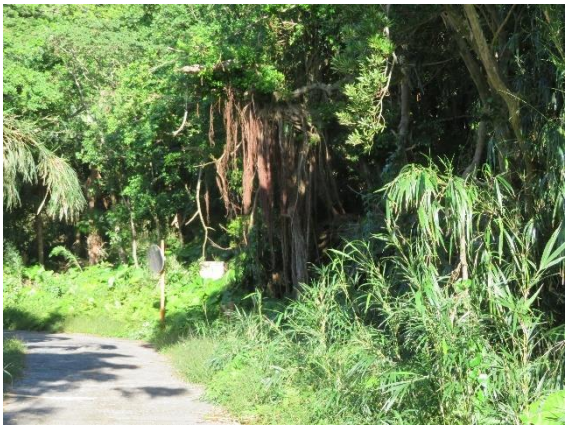
ここから 100mほど歩いた山裾に樹木で覆われた溜池があった。中山池と呼ぶ。運動公園線の内側はかつて田や畑があり、島の重要な食料生産拠点であったから、ここに供給する農業用水を貯めていた場所だ。池の堤体の高さは 3.5m、総貯水量は 3,000m^3 である。そして

この溜池の脇にはハザードマップが掲げられていた。仮に中山池の堤体が決壊した場合の水の到達時間、浸水箇所と予測水位が示されている。

道路の左手の山はアコウ、シイ、ガジュマルなどの樹木にリュウキュウチクが混ざる。この森にはけっこう珍しい野鳥類が生息しているようで、バードウオッチングにやって来るマニアもけっこういるそうだ。中でもトカラ列島や奄美大島の固有種であるアカヒゲは代表的な小鳥である。トカラ列島にやってきてからしばしば見かけてきた。

さらに先に進むと、源太郎峠と書かれた標識が立っていた。田や畑を含む集落を囲むように、いわば外輪山のように高い山で囲まれていることから、島の東側に抜けるには大きく迂回しなければならなかった。この不便さを解消するため、源太郎という奄美大島生まれの移住者が 1 人で独自に山道を切り開き、1878（明治 11）年に完成させたとされる道である。この故事から源太郎峠と呼ばれている。現在も通行可能なのかわからないが、入口ははっきりわかった。

運動公園線を下っていくと、コミセンの脇に出た。南之浜道路との合流点あたりに消防車の車庫がある。合流点から港の方向に少し下ったところにＮＴＴの中継所、バキュームカーの車庫（島には浄化槽が整備されているが、一部いまだ汲み取り式の家もあるからなのだろう）、水産加工場、さらにその下に上述した山海留学生の「平島寮」が置かれている。その反対側には村営住宅があった。村営住宅は戸建て３棟、２軒長屋２棟の合計７戸分である。



健康広場（左）、ガジュマルの大木（右）

水産加工場

水産加工場の前でタイミングよく施設を管理運営する西薗さんにお会いし、加工場内を案内してもらった。加工場では島で漁獲された魚介類を急速凍結しており、2020 年５月から稼働している。この日は時化で原料が水揚げされなかったので、休んでいた。たまたま西薗さんが通りかかったおかげで施設を見学して、話を聞くことはできたわけだ。

西薗さんは地域おこし協力隊員で、今年の６月に着任している。彼は鹿児島県出身で、琉球大学理学部海洋学科の２期生だった。細かなことはわからないが、中退して郷里に戻り、芋焼酎「魔王」で有名な白玉醸造の杜氏を長いことしていた。つまり酒づくりのベテランである。定年で退職後、継続雇用の話もあったが、ブラック企業（？）であったことやもともと魚釣りが好きだったこともあり、平島のこのプロジェクトに応募したのであった。

加工場にはテクニカン社製の「凍民」というアルコールブライン凍結の冷凍機が入ってい

た。フィレーや切り身等に予め加工処理し、おおむねマイナス 30℃で急速凍結する。その後、包装し冷凍庫に保管する。同じ凍結機は以前訪れたことのある宝島にもあった。トカラ列島は流通条件が悪いため、時化などが続けば出荷できないことがあるので、冷凍保存しておけば廃棄しないで済むというねらいである。加工場内には凍結機の他に真空パックの機械、冷凍・冷蔵庫も整備されていた。

加工対象となる魚種はキンメ、タルメ、カンパチ、キハダ、チビキ、ムツ、アラなどで、漁師から買い上げる。冷凍品は島民や民宿に販売するとともに島外にも出荷しているようだ。ただ冷凍品なので土産物には不向きとのこと。平島の漁業生産量は６トン前後なので事業として継続するためには生産量を増やす必要があろう。加工場の入口に地元向けの冷凍魚の広告が貼ってあった。カンパチは 100ｇあたり 198 円、カツオは同じく 158 円、チビキは 398 円だ。協力隊の任期は３年である。私の個人的な感想では、水産加工事業を軌道に乗せるのは難しいと思われる。

東京都の青ヶ島は、島で芋と麦を栽培して焼酎をつくり、あの小さな島で 10 以上の銘柄がある。そして「青酎」のブランドで結構人気を博している。水産加工よりも醸造の専門技術を活かして平島で芋焼酎をつくったらどうかと水を向けると、青ヶ島にも行き、「青酎」にも詳しかった。しばらく焼酎談義となる。

前薗さんによると、「魔王」は減圧蒸留を行い、クセが少なくキレのよい焼酎に仕上げ、これが現代人に受けているという。承知のとおり「魔王」は「森伊蔵」と並ぶ著名な芋焼酎としてプレミアムがつき、とんでもない値段で売られている。私などはこうした有名ブランドよりもむしろクセがあって個性的な「青酎」のような焼酎を好むというと、プロ中のプロの前薗さんも同意見であった。

三島村の黒島では最近芋焼酎づくりを始めたことをどこかで読んだことがあったので、この例からも平島で可能ではないかと問うと、黒島の施設は３億円も投資しているという。そしていちき串木野市の浜田酒造が指導しているとのことだ。

前園さんによると、醸造所の新規許可を得るのは難しいが、離島振興ということになれば可能かもしれないという。彼によれば、平島では昔サトウキビを栽培していたことがあり、黒糖酒はおもしろそうだが、現状では奄美諸島だけで許可されているのでこれを十島村に拡大するにはハードルを一つクリアーする必要があるという。それなら、南大東島や伊江島でつくっているラム酒はどうかと提案した。

水産加工場の外観（左）、加工場の内部（右）

鹿児島大学生

水産加工場の前で前薗さんと立ち話をしていると、もう一人の地域おこし協力隊員である金井たけしさん（24 歳）が現れた。彼は現役の鹿児島大学水産学部の学生（指導教授は山本智子先生）で、休学して協力隊員になった。卒業できるか危ういが、指導教官が何とかしてくれるかもしれないという。横浜市青葉区の出身で、実家はたまプラーザだという。たまプラーザには親戚があり、幼年時代に一時期過したことがあるので、何やら身近に感じられた。

現在、平島で唯一の釣り専業漁師である日高良一さんの船に乗って漁業の研修中で、３年間の任務を終えたら何れは平島で漁師になることを希望しているようだ。

漁業は水深 300m付近に生息するチビキ（ハマダイ）を狙う深海釣りだ。チビキは価格が 2,000～3,000 円／kg で、島で獲れる魚の中では最も単価が高い。釣りには電動リールを使う。この他にトローリングで、キハダ、カツオ類、カマスサワラなどを釣る。

島の漁業はもともと丸木舟で操業していたから、サワラ、カツオ、トビウオ、ムロアジなどの表層近くに生息する魚類を獲っていた。今日のように深場の釣りが始まるのは、漁港が整備され、漁船の動力化と大型化が進んだ 1990 年代以降のことである。

平島の漁師は金井さんの師匠の良一さんの他に４人いる。このうち３人は民宿（たいら荘、平和荘、海の宿しらさか）を兼業しており、遊漁案内業も営む。漁獲した魚介類は民宿で食材として提供するとともに、余剰分は鹿児島市内へ出荷する。もう１人はシゲさんという方で、こちらは趣味程度の漁業のようだ。南之浜港の漁港区域には日高良一さんの漁船・明姫（あき）丸の他に３隻が係留され、もう１隻は陸置きされていた。５人とも釣りが主体で同じような漁業形態だ。この５人は十島村漁協の正組合員となっている。なお准組合員は 11 人である。

金井さんの軽トラックには「結婚相手募集中」のステッカーが貼られていた。「僕と一緒にここで暮らしてくれる方を募集しています。まずはお友達から始めましょう」と書かれていて、島に定住し漁師になることを本気で考えているのは間違いない。

２人と話しているうちに、もう１人の協力隊員である中年の女性が通りかかった。彼女は看護師で、訪問医療を担当しているとのこと。偶然、平島で働く３人の協力隊員に会ったことになるが、３人は何れもこの下にある村営住宅に住んでいる。

地域おこし協力隊員の金井さん（左）、指導を受けている日高良一さんの漁船・明姫丸（右）

２人の地域おこし協力隊員から話を聞いた後、民宿たいら荘に戻る。風呂に入って夕食になった。夕食は、カツオ、カンパチ、チビキの刺身、フエフキダイとアカハタの唐揚げ、チ

ビキのあら汁、キハダマグロの佃煮と島で獲れた魚のオンパレードであった。そしておそらく郷土料理であろうツワブキの混ぜご飯が出た。

夜空を見ると、満天の星であった。こんなに星が輝く空をみるのは、小笠原に行った時以来のことで、絶海の孤島は夜空が美しい。

令和４年 10 月 20 日

水源地

平島でまだ行っていないところがあった。集落の先にある水源地である。６時 25 分に民宿を出発し、水源地に向かった。小学校を過ぎ、村道運動公園線との分岐をまっすぐに進むと教員住宅があった。比較的新しい建物である。ここから先に建物はない。

道路は急斜面の中腹につくられていて舗装されている。ただ落石が至る所に見られ、危険な道だ。朝焼けの海には悪石島が浮ぶ。やがて道は行き止まりになり、その先にフェンスが張られていた。

フェンスの内側にコンクリート製の水槽があり、山からの湧水はここに貯められ、集落に供給されている。集落内には中継用と思われるタンクがあり、どこかで滅菌処理されて簡易水道を通じて各家に配水されている。民宿の用沢さんによると、水が枯れることはないそうだ。

この水源地の西側の頂上が御岳（242.9m）であり、登山道もあるようだが、３年に１度行われる「御岳参り」以外は登ることができないとパンフレットに書いてあった。

水源地への山道（左）、水源地の貯水槽（右）

７時すぎに宿に戻り、朝食（目玉焼き、魚の照り焼き、キャベツ、オクラ、ソーセージ、レタス、ヨーグルト）を食べて待機。８時 15 分に宿を出発する。港には島の 65 歳以下の男性が荷役作業のために集まっていた。また診療所の看護師、出張所の職員も来ていた。

フェリーは予定よりも遅れて８時 45 分に到着。１人が下船し、８人が乗船した。来た時に一緒だった気象庁の職員と浄化槽の水質検査の職員の４人も一緒に乗船する。彼らは最も新しい民宿である「しらさか」に泊まっていたようだ。

フェリーは荷役作業を終えて８時 55 分ごろに平島を後にして、諏訪之瀬島、中之島、口之島を経て、18 時 25 分に鹿児島港に着いた。約 10 時間弱の長旅であった。タクシーでこの日の宿であるリッチモンドホテル天文館に行く。